

家相の上手な生かし方

家を建てる方の中でも、特に建て替えをされる場合に「家相」を気にする方が多いようです。

「今の家はいろいろあったので・・・」というのがその理由のようですが、では家相に従えば本当に幸福がめぐってくるのでしょうか？

このような疑問にお答えしながら、家相を上手に家づくりに生かすにはどうしたらいいか、といったヒントを今月から順次お届けしたいと思います。

家相はその科学的根拠さえしっかりつかんでおけば、恐ろしいものでも必要以上に神経を使うものではありません。

これからお話しすることの中から少しでも家作りにお役に立てることがあれば幸いです。



その1「家相」ってなに？



家相は古代中国に生まれた占いのひとつで、奈良朝の頃宮廷建築に伝わり、やがて日本の建築技術の進歩や気候風土、習慣などの影響を受けて少しずつ変化しながら現代へと伝わったと言われています。

家相には、まだ家づくりが自然条件だけで決定されていた時代に、風通しや日当たりの加減、湿度、環境衛生、居住者の心理などさまざまな角度から、「どうしたら安全で気持ち良く暮らせるか」「家の間取りや材料、敷地の状態がそこに住む人にどんな影響を与えるか」といった家づくりのための生活の知恵が、いろいろと集められたものといえます。

ただ、このような経済的知恵に、後になって陰陽五行説などの中国古来からの相学（物事の形に現れたもので運命を占う方法）など、占いの要素が盛り込まれたために、一般の人達にはわかりにくく、興味本位な占いの面だけがクローズアップされているという面もあるようです。

では家相を家づくりに上手に取り入れるには、どうしたらいいのでしょうか？それにはまず家相の科学的根拠を、良く理解することではないでしょうか。

家相は単なる非科学的な占いに準ずるものを除けば、①建築工学や住居的根拠に基づくもの、②家に関する社会的タブーを表したものから成り立っており、基本的な考え方は現代に通じるものも少なくありません。

ただこれを単純に信じ込むのではなく、現代の住生活の変化や建築技術、設備の進歩に合わせた解釈と応用が加えられれば、本当の意味で私たちの家づくりの参考になると言えましょう。

●なぜ鬼門説が生まれたの？

家相と言えはすぐ思い浮かぶのが「鬼門・裏鬼門」といった言葉だと思います。
「鬼門」というのは家相でいう方位の北東（艮）方をさしています。

またこれと反対の方位、南西（坤）方を「裏鬼門」と呼び、家相ではこれらの方位を忌み嫌う傾向が強いです。どうしてでしょうか？

一説には、中国の北東数万里の所に「度朔山」という山があり、ここに40里四方に枝を張っている大きな桃の木の本東に伸びる枝に萬鬼が集まって人間を殺害した。そこで北東を鬼門として避けるようになったとされています。

また、冬にシベリアやオホーツク海から吹きつる厳しい北東の風を悪鬼にたとえたという説。さらには、満州（現在の中国東北地区）や中国北部からの漢の領土を犯した匈奴に対する警戒心が、鬼門説を育てたとも言われています。

一方日本でもこの鬼門説が伝わった大和朝廷の頃には、蝦夷征伐などで知られるように、北東は敵の住む未開の蛮地であったわけで、このような情勢が鬼門説を受け入れる基盤になったと考えられています。



●なぜ鬼門にトイレがあってはいけないの？

では鬼門説はまったく科学的根拠のない迷信か？と言えば、そうとも言い切れないところもあります。

家相ができた頃は、住まいの環境が自然条件だけで決定されていました。現在のように冷暖房設備や換気扇、断熱材といった便利なものがなかった時代ですから、窓の位置やかまどの位置ひとつとっても、自然条件を上手に生かす知恵が要求されたと考えられます。

例えば裏鬼門にあたる南西は一年を通じて一日中西日がさすので、汚水をためたり汚物をためておくと腐敗しやすく、ハエやうじがわきやすいという制約がありました。

また、日本の夏は南西の風が強く吹くために、部屋の中に悪臭が流れ込みやすい場所でもあります。

一方、鬼門にあたる北東は、日当たりが不十分で乾燥しにくいため、湿気による腐敗がおこりやすいということが言えます。また、冬寒い北風が強く吹き込むのも主に北東です。

このように衛生上、健康上の配慮から、長い期間のうちに言い伝えられた“生活の知恵”といえますが、冷蔵庫など電化製品の普及、下水や水洗便所の発達、あるいはゴミ処理方法が合理化してきた現代では、必ずしもこれにこだわる必要はないと言えます。

それより狭い敷地を有効に生かして使う努力をした方が、賢明といえるでしょう。



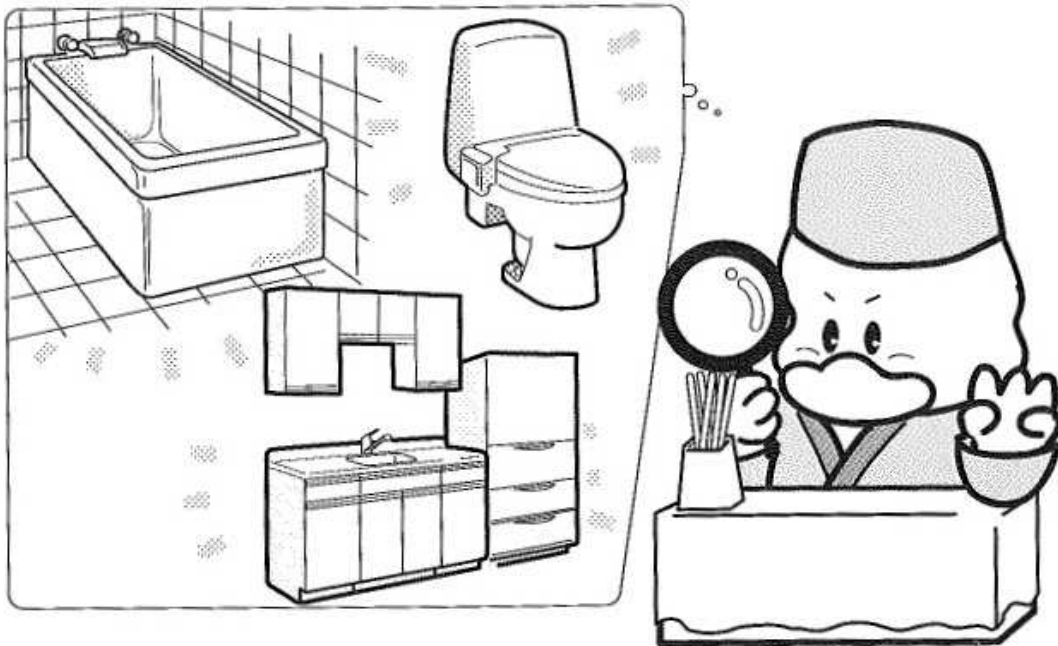
●鬼門の扱いはどうすればいいの？

家相の吉凶については諸説さまざまで、一概にこれが絶対ということは言い切れないようです。

しかし、この鬼門と裏鬼門、そして家の中央の3ヶ所に注意すれば、家相の第一条件はだいたいにおいて満足されます。

つまりこの場所に汚物を扱う場所を置く場合は特に「衛生上での十分な配慮が必要」という意味ぐらいに理解されておけばよろしいと思います。

むしろ最近はこの様なケースが増えていますから、これからお話する科学的根拠に基づいて、建物の構造や材質、設備の補充を考慮し、それぞれの状況に応じた「最も住みやすい家づくり」を考えていただければよろしいでしょう。



● 「北東・南西の浴室は大凶！？」を克服する法

「浴室を北東（鬼門）や南西（裏鬼門）につくるのは凶相だ」とする説は、次の2つの理由からと考えられます。

ひとつは、湯水をふんだんに流す浴室は風通しをよくして湿気がこもらないように配慮が必要だったことから、日当たりの悪い北東にあったのでは乾燥しにくく、白アリや腐食の原因になりやすかったためだと思われます。

もうひとつの理由は風向きです。夏は主に南から風が吹き、冬は反対に北から風が吹くので、まだガス釜などがなかった昔には、風上で火を炊くことは防火上危険なことだったと考えられます。

現代でも考え方の基本は変わりませんが、水まわりの都合上、北東や北方に浴室をもってくることも少なくありません。

したがって浴室をつくる時は窓を大きくとって自然換気をよくし、浴室や浴槽をよく乾燥させるようにします。また壁や床はタイル貼りにして防水効果を高めれば、防湿の面でも充分効果的です。



● 「南西のトイレは胃腸を患う！？」を克服する法

トイレの悪臭は、溜った糞尿から発生するアンモニアガスや有機ガスによるものです。

このガスは気温が上がると膨張する性質があり、一般に気流が南西から北東へと流れる日本では、トイレの位置によってはガスが膨張し、気流に乗って直接家中に充満しかねないというのが、この家相の考え方のようです。

現在は水洗トイレが普及し、汚物はすべて洗い流してしまうので、このような心配はほとんど解消されたと言っていいでしょう。

むしろ最近では「防寒」と「換気」に重点を置いて設計するケースが多いといえます。

特に「冷え」は人の血圧を、急激に上げるので、冬の冷えびえとしたトイレは高血圧の人にとってはまさに要注意。

暖房器具を備えつける方法もありますが、内装仕上げによっても随分と差があります。

例えば水を扱わない陶器タイルなどは冬、トイレが冷えびえとしますので、特に北側のトイレなどは暖房の工夫をしたいものです。

換気窓か換気扇と取付け、トイレにニオイがこもらないようにします。



● 「南西の台所は家族が病気にかかりやすい!？」 を克服する法

南西（裏鬼門）に台所のある家は病気になりやすいという説ですが、これは夏気温が上がりやすいことから、現在のように冷蔵庫のない時代には食物が腐りやすく、食中毒や赤痢、コレラなどもよく発生していました。

また夏には南方からの風が主に吹いてくるために、調理のニオイや煙が家中に広まりやすかったこと。

さらに火を扱う場所が風上にあったのでは、万一の時火災が広まる危険があったことから、このような説が生まれたと考えられます。

現在では冷蔵庫の普及で食物が腐りやすいということはあまりありませんが、通風と換気にはやはり気を配りたいものです。

火を多く使ったり、調理のニオイがこもる台所はとても空気が汚れやすくなっています。また風通しをよくすることは室内の熱気や湿気を除く上でも効果があります。

特に炊事や湯沸器を使う際には大量の空気が必要になりますので、換気扇をまわして燃焼ガスを排気し、新鮮な外気の補給を忘れないようにしましょう。



● 「裏口のない家は凶!？」を克服する法

よく「出入口がひとつしかない家は不吉だ」と言われていますが、これは安全性と通風の面から出てきた言い伝えと思われます。

実際、家事や事故が起きた時、ひとつしかない出入口をふさがれてしまったら、逃げ場がなくなってしまうというわけです。

一方が窓でもかまいませんから、いざという時逃げ出せるように、なるべくなら出入口を2つ取るということを心がければよいでしょう。

一方、通風は家の中の熱気や湿気を除く上で欠かせません。風は入口と出口があって初めて流れています。

一般には風向きに直角で、かつ建物の表裏両側に開口部があるのが一番ですが、対向の位置がムリな場合は、少なくとも部屋の異なった2面に開口部を設けるようにするとよいでしょう。



● 「台所に近い寝室は凶！？」を克服する法

台所は人の動きも激しく、火を扱う場所でもあるので危険が多い、といった配慮からこの説が生まれたと考えられます。

これは「寝室と門口が一直線にあるので凶」という説にも通じます。つまり道路に近い場所や玄関からまっすぐ通じる場所は、外の騒音が入りやすく外敵におびやかされやすいなど不都合が多いというわけです。

しかし限られた敷地の中で間取りを考える場合、必ずしもこの通りにいかないことが多く出てきます。

むしろ住まいに遮音効果を高める配慮を取り入れる方が合理的です。例えば窓は必要以上に大きくしないとか、窓に厚手のカーテンをかけるとか、内障子を付けるなどすれば遮音性能がかなり上がります。また遮音性能の高い建物を選ぶことも必要です。

もうひとつ、寝室には日当り・風通しの良さも大切です。よく「大人が一晩寝るとフutonはコップ1杯分の水を吸い込む」と言われるように、寝室は意外に湿気がこもりがちです。

日中は通風をよくして部屋の中や寝具の湿気を乾燥させると同時に、睡眠中の換気にも気を配るようにしたいものです。



●「食堂は東南を選ぶべし!？」

食堂は台所や居間に近接してつくられるのが一般的です。

そこで台所と同じように、どちらかといえば朝寒く西日の強い西方や北方よりは、朝日が入り、朝の新鮮な空気の入る東方が、健康的にも気持ちのいいものです。

特に東南は「辰巳の黄金水」と呼ばれ、家相では「心身ともに快適となり、家運が繁栄する吉相」と言われるのも、このような理由からだと考えられます。



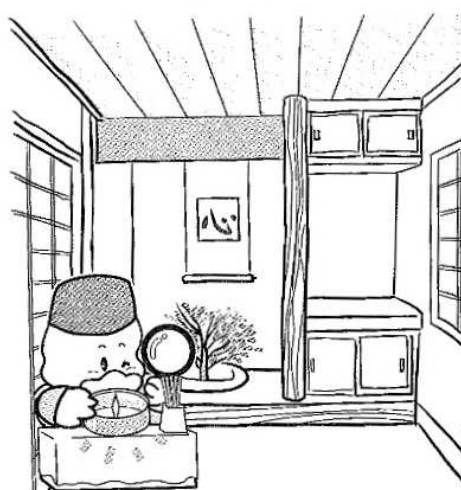
●「床の間は西方、北方に置くべし!？」

住まいに“ゆとり”をもたらす床の間は、作る場所や周囲のバランスを考えて、一つは欲しいものです。

特に家相では、「北方に設けられた南向きの床の間は、家族の品位を保ち、社会的信用、経済的面で恵まれる」と言われています。

床の間のある側は全部壁で塞がれるのが普通ですから、冬、寒い風が吹き込んだり、夏、強い西日が差し込む西方か北方に床の間を置くのが合理的です。

反対に南方や東方に床の間を設けたのでは、日当たりも悪くなり、凶相の原因にもなるというわけです。



●「商家の神棚は、外から見えない場所に飾るべし!？」

「神棚を店の見せ物のように飾るのは失礼だ。不敬にあたらぬような置き方をしなさい」という意味と考えられます。

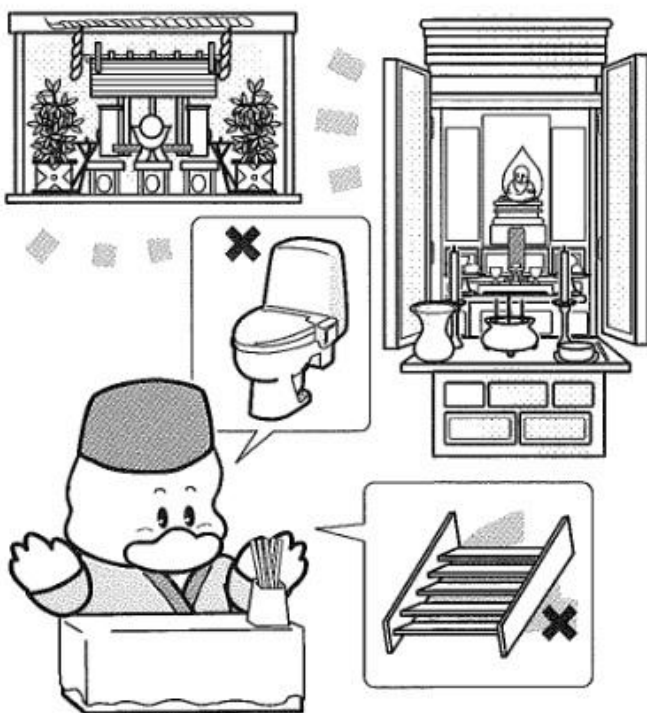
神棚の置き場所については各説によってバラバラで、特に決まった場所はないようです。但し、階段の下やトイレの近くなどのように、失礼にあたる場所は避けるのが一般的とされています。

また、神棚の下を通り抜けするのも、頭上にお供物が落ちてくる場合があるので避けた方がいいようです。

2階建ての場合、「2階から踏みつける場所はいけない」と考えている人がいますが、これはちゃんとした床があるのですから失礼にはあたりません。

仏壇も同様で、特に置き場所をそれほど気にする必要はないようです。部屋数が少なく適当な部屋がない場合は、押入れや天袋の中に設けてもよしとされています。

神棚と仏壇は一緒にせず、少し離すか、仏壇を一段下げるのが一般的です。

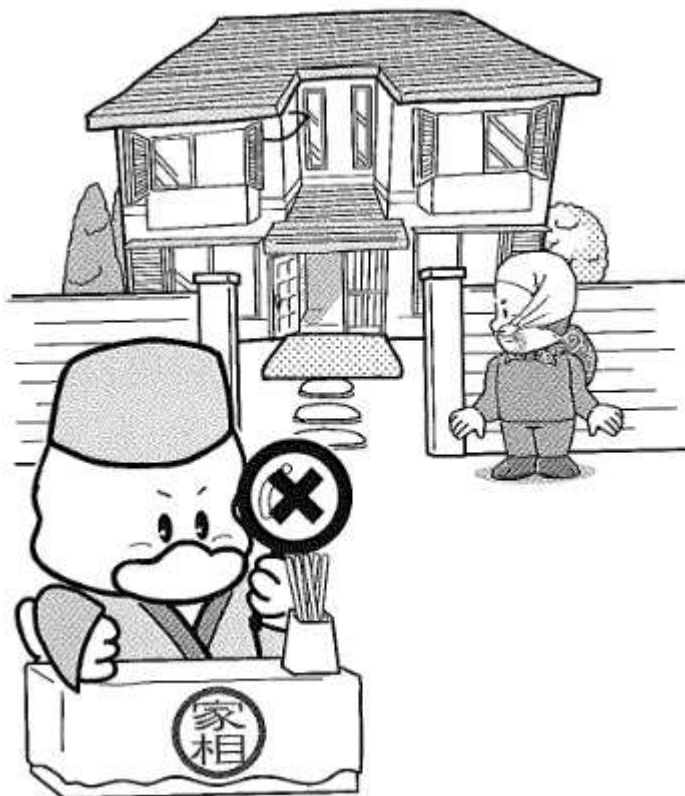


●「門と玄関の正面は重ならないようにすべし!？」

「外から家の中が見通せるような家は、泥棒に入られやすいので災難にあいやすい」ということと、昔は敷地が広がったこともあって、門から玄関へのアプローチを長く複雑にすることで、いかにも家に到着した、あるいは訪問客が心の準備をするための心理的効果を考慮した、というのがこの説の根拠のようです。

最近のように敷地も限られてくると、そうアプローチを長くすることも出来にくいものです。

そのような時は門を玄関の正面からちょっとずらせば、家相で言う災難の相にはあてはまらないといえます。また盗難を避けるためにも、この方がいいといえましょう。



● 「古井戸はむやみに埋めるべからず!？」

「井戸を埋めるとたたりがある」などというのは、井戸を埋めた後は周囲と地質が違うので、その部分だけ地盤沈下が起きやすい（不同沈下）からというわけです。

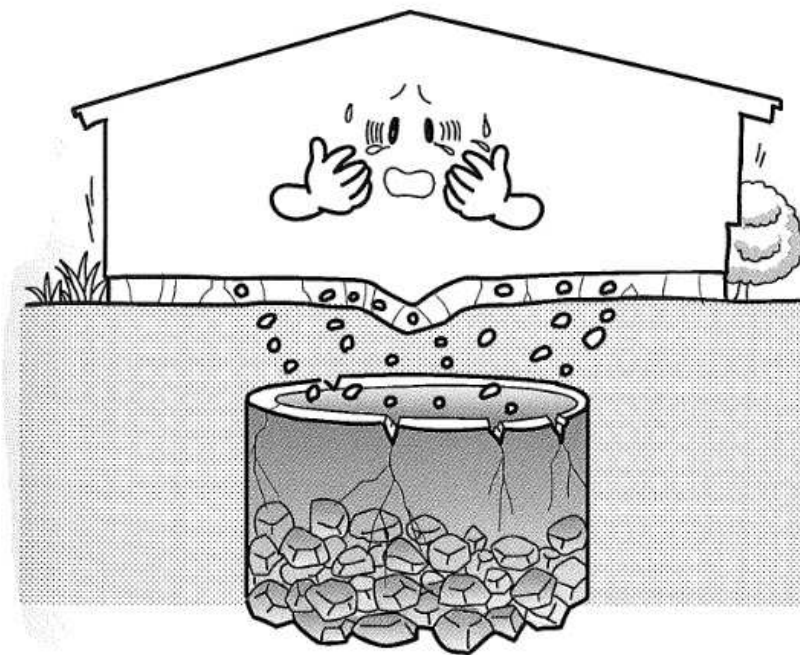
特に井戸を埋めたあとに家の基礎がきたりすると、建物の重さで基礎に不均等な力が加わり、構造自体に重要な変化が生じて建物を倒壊させる原因にもなります。

井戸を埋める時には、ゴミやコンクリートの残骸、粘土などはすぐ沈下を起こすので絶対に避けるようにしましょう。

中でもゴミなどの有機物が含まれていると、地中で発酵をおこすのでよくありません。一番良いのは砂と水を流し込む方法です。

井戸のように周囲を粘土質が固めている場合は、砂がまわりに流出する心配もなく、何にもまして砂は上からの重みに耐える力が粘土質以上に大きいからです。

このような場合には、まずご相談ください。



●「樹木を切り払った土地に家を建てる時は、根を残すべからず!？」

これは、万一地中に樹木の根のように発酵したり、腐りやすい有機物があると、その部分に穴があき、土地が陥没したりシロアリの巣になりやすいためです。

また、木の根に限らず、整地の際には石なども取り除かないと、土地がよくしまらず、地震や大雨の際に思わぬ被害を受けかねない、というのがその理由です。

「基礎の基礎は地盤」というのは、家づくりの基本です。したがって建築の前には敷地調査を行い、その中で地盤の状態もよく調べます。

状況に応じてお客様と打合せの上、万全の処置をとるようにしています。



●「家の部分改築、2階の増築は避けるべし!？」

部分改築をした建物は、古い部分によけいな負担がかかるので、結果的にかえって建物の寿命を縮めてしまいがちです。

外観も不釣り合いが生じ、費用も場合によっては建替えとあまり変わらない費用がかかることもあります。

特に平家に2階を増築する場合、構造的にも危険度はずっと大きくなります。それはこの様な場合、2階家にもかかわらず通し柱がありません。

しかも1階の柱が2階を支えるには細すぎる上に、基礎構造が2階を支える構造になっていないことが多いからです。

このような無理を避けるためにも、マイホームプランを考える際には、将来の計画、家族構成の変化などもよく考えた上で、平面プランを建てることをおすすめします。



● 「床の低い家は避けるべし!？」

「家族が病気にかかりやすいのは、床が低く地中の湿気が家に入り込むためだから、床は高くしなさい」という意味です。

実際、床の低い家は地中の湿気を受けて床が腐ったりシロアリが住みつきやすく、耐久性も損なわれます。

特に梅雨時など床下の換気が悪くなると、ひどい時は床全体が浮き上がることもあります。

建築基準法では、床下は45cm以上と決められています。



● 「妊婦がいる時は普請するべからず!？」

新築、増改築にかかわらず、工事中は何かと気ぜわしいものです。

もし妊娠中のお嫁さんがそのために負担が増えて流産でもしては、といった配慮がここには含まれていません。

もうひとつの理由は、新築の家は充分乾燥していないために湿気が多く、妊婦の健康によくないためです。

特に昔の家は壁の乾燥などはすべて自然にまかせていたため、乾きも遅く湿気がしばらく残りました。

現代でもこの湿気の問題は特に鉄筋コンクリートの家で重要です。

新築の家ではしばらくの間、特に通風、換気に十分気をつけましょう。



おわりに…

住みよい家をつくるために

さて、家相についてのおおよその考え方、見方についてわかっていただけましたでしょうか？

家相にはこの他にもいろいろな説がありますが、その他の説についても考え方はほぼ同じと受けとっていただければよろしいと思います。

何度も繰り返すようですが、現在では敷地条件も限られており、むしろそれぞれの条件を最大限に生かす工夫を取り入れた住まいこそが、そこに住む人にとって最も住み心地のよい吉相の住まいと言えると思います。

その際の着眼点は、この家相でも取り上げられている日当り、通風、換気、遮音性、合理的な動線、そして建物自体の安全性といった点についての考え方を参考にするという程度に活用されるとよろしいと思います。

